

ある日、ラフマーンが書齋で寛ごうとすると、小さな先客がいることに気付いた。

最愛の《ラフマーンの息子》であるディアウスだ。

——相変わらず本の虫か……あるいはアーチェンの影響かな。

そういえば、ディアウスは一人だけでアーチェンがいない。珍しいことである。この書齋は最近ではラフマーンのものではなく、まだ十にも届かぬ少年少女二人のものになりつつあったのだ。

（後で知ったのだが、この時、アーチェンはいつもの偏頭痛で寝込んでいた。強靱な精神のアーチェンもその肉体は病弱な幼子に過ぎない。ディアウスは看病をしようとしたら、「睡眠が一番の良薬、そしてあなたはそれの邪魔」と追い出されたらしい）

「何を読んでいるのかね？」

「ん、《五書啓典》だよ。今《出エジプト記》のところー」

「そうか、それはよい事だ」

ラフマーンは褒めた。《五書啓典》もまた偉大なる使徒の記録である。無論、《帰依する者》であるラフマーンからすれば《第一啓典》や《預言者言行録》こそ熟読させたいところだが、そちらは既にディアウスも読み終えている。この際、読書の幅を広げるのはよい事だ。

「でも、ちょっとわからないところがあった」

「わからない？」

ラフマーンは首を傾げた。

退屈な部分も多い《五書啓典》の中で、《出エジプト記》はそれなりに見どころだ。特に前半はいい。奴隸として虐げられ、殺されそうにもなった《ヤコブの子》たちが、口下手で気弱だが、しかし神の言葉を聞いた主人公に従って、エジプトを脱出し、艱難辛苦の末に、新天地を目指す——という荒筋は一大冒険譚である。

年頃の少年にはむしろびつたりの部分だ。ところが、ディアウスはわからないという。

「何がわからないというのだ？」

「うん、この《ヤコブの子》はどうしてエジプトから逃避したんだろう？」

ラフマーンはその問いの意味を図りかねた。

「決まっている。《唯一の神》の御言葉によつてだ」

「神様の言葉を聞ける《預言者》たちは、ね」ディアウスはどこか皮肉皮に答える。「でも、《預言者》だったのは、主人公と……あとはミリアム姉さんぐらいだよな？」

「……何が言いたい？」

「神様の言葉が聞こえなかった残り六十万人の《ヤコブの子》は、どうして口下手な主人

公に従って、住み慣れたエジプトから逃げようとしたんだろう？」

「そこに書いてある通りだ。迫害されていたからだ。搾取されていたからだ」

「自助努力すればいいじゃないか。自己責任だよ」

ラフマンは呆れた。この息子は何を言っているのだ。

「ディアウスよ。お前はちゃんと読んだのか？ この《ヤコブの子》は民族で、出自で差別されていたのだ。努力でどうにかなるものではなかったのだぞ」

「父さん、それは違うよ。ヒトの先天的な差異なんて、俯瞰すれば皆無に等しいんだよ」

ディアウスはケラケラと無邪気な笑みを浮かべ、そして、滔滔と語った。

ヒトの遺伝的多様性の乏しさは特筆に価する。何しろ、ヒトには亜種が全く存在しないのだ。僕みたいな肌の黒い南方系も、母さんみたいに肌の白い北方系も、アーチェンみたいな黄色い肌の東方系も、遺伝的にはほとんど差がない。この丸い大地の反対側にいるヒト同士の遺伝的隔絶は、小さな山の反対側にいる猿同士の遺伝的隔絶よりも、はるかに小さいのだ。

何しろ、猿は山があればその麓で暮らそうとするのに対し、人間は山があれば、とかくその向こう側に行きたがる。これは川や海、砂漠や氷河でも同じ事である。人間は必ずその向こうに行く。

これだけ走破能力に優れた——いかなる障害をも必ず乗り越えようとする生命体が、この狭い惑星の中で、遺伝的多様性を育める程の物理的隔絶を確立できるはずがない。

——…さすがに自然科学系の知識については、幼子とはいえ大したものだ。いや、幼子故というべきかな。

ディアウスの『演説』を聞き終えたラフマンは呆れと共に、言葉を紡ぐ。

「……そうだな。お前の言う通り、人種間の差など皆無に等しい。民族も出自も、所詮は人間が決めているものだ。しかし、それがどうしたというのだ？ この《ヤコブの子》が差別されていたことに変わりはないぞ」

「人間が決めたことなら、人間が変えられるさ」

ディアウスはあっさりと答えた。

「だからさ、《ヤコブの子》に厳しい人たちも、一生懸命頑張れば、きっと《ヤコブの子》を認めてくれるよ」

あまりに無邪気なディアウスの物言いに、ラフマンは呆然として反駁できなかった。

「それにそんなに《ヤコブの子》が嫌われていたのなら、《ヤコブの子》にもどこか悪いところがあったんだよ。ならまずは、そこを改めるべきだったんだよ」

ラフマンは自信満々な息子に

——少し甘やかしすぎたか…。

と後悔した。

この頃、ディアウスには敵対的な環境というものがほとんどなかった。

逆に、ラフマーンのもう一人の子というべきアーチェンにはそれがあつたのだろう。

息子であるディアウスと、娘であるアーチェンが初めて出会つた時、ディアウスは己の懐から飴あめを差し出したという。物で釣ろうとは浅ましいともいえる。が、その時のアーチェンは餓えていたのだ。それはディアウスの思いやりであり、優しさなのだろう。

だが、アーチェンはそんなディアウスの頬を引っ叩き、力でその飴玉を奪い取つた。いきなりの不条理に遭遇したディアウスは

——「どうして、僕を叩いたの？ 僕、何か悪いことしたの？」
と尋ね返したという。

……つまりはそれが『ディアウスの世界』だったのだろう。

ディアウスが自分達の家族となつてから随分経つ。

その長い間、ディアウスは大切にされてきた。常にちやほやされてきた。子供がいなかつた自分達夫婦にとって、我が子ディアウスはまさに至宝なのだ。父であるラフマーンも母であるヌールも、共に住む使用人達も、皆ディアウスを愛し、慈しんできた。

無論、猫かわいがりするヌールと異なり、ラフマーンは厳格さを忘れなかつた。

甘やかし過ぎると毒になる。ディアウスが悪戯をしたり、悪口を言つたりすれば、きつく叱り付けた。これは使用人たちにも言い渡してある。ラフマーンの見るところ、その真意は（ヌール以外には）理解され、自分がいないところでディアウスが悪さをすれば、代わりに使用人が叱ってくれていた。

——……だが、それがよくなかつたのかもしれない。

この『ディアウスの世界』において、叱責や非難は常に悪意ではなく善意に基づいている。皆が皆、ディアウスのためを思い、心を鬼にして、自分に厳しくしてくれている。自分が非難される時には必ず正当な理由がある。だから、ディアウスは己を改めようとする。そうすれば、すぐに皆が優しくしてくれる……。

かつてアーチェンから暴行を受けた時も、ディアウスは同じ事を考えたのだろう。

少女は己の頬を引っ叩いた。これは何か自分に誤りがあつたからに違いない。故にそれを改めねばなるまい。そうすれば、少女もきつと自分を許してくれる。他人の物を奪うなど余程のことなのだ。正当な理由もなく、誰かを傷つけるなどありえない。何しろ、ディアウスの周りにはそんな者は一人もいないのだ。

……善意によらずして、他者に危害を加える輩がいるなど、想像もできなかったのだ。そもそも、悪意というものが存在することすら理解できないのかもしれない。

——無理もない。一方的に虐待され蹂躪されるような敵対的な環境に身を置いていないのだから。

故に《ヤコブの子》の苦しみがわからないのだ。

無論、ディアウスはそれなりに聡明さを秘めてもいる。

民族も出自も所詮は人間が決めている——という言葉はなかなか印象深い。また、逃げ出した奴隷への非難には、今のディアウスと同じものがあつただろう。だが……。

「《ヤコブの子》は割に合わない——と考えたのだろう」

「割に合わない？」

「そうだ。彼らに認めてもらうには自分たちの屍を山の如く重ねねばならない。それではとても採算が取れないということだ」

「でも、諦めないで頑張れば……」

「馬鹿げた事を言うな」ラフマンは息子の言葉を遮った。「お前は死んでしまった同胞の前で『諦めないで頑張ったけれど、うまくいかなかった。ごめんなさい』と頭を下げるつもりか？」

「だけど、エジプトから逃避すれば、それこそ野垂れ死にするかもしれないでしょう？」

「それはその通りだ。実際、《ヤコブの子》たちも逃避の最中『こんなことならエジプトにとどまればよかった』と愚痴をこぼしているだろう」

父の否定と肯定に、ディアウスは俯き、考え、そして、弱気な言葉を漏らした。

「……逃避するのが正しいのか、間違っているのか、僕には難しい」

「現実における決断とはこのようなものだよ。二者択一などない。正解に至るための情報だけが全て揃っている事もない。不完全で、その癖、過剰な情報を頼りに決断せねばならない。……例外は学校で出される数学の課題ぐらいだな。あれは回答に至るための要素をすべて与えてくれる。その点、お前の『諦めないで頑張れば』という姿勢も学校に通う生徒としては誤りではない」

「……その前提が存在しなければ、どちらが正しいかはわからない？」

「いや、一つだけはっきりしている。それは……決めるのは貴様ではないということだ」

何の能力もない、何の責任もとれない貴様には何一つ決める資格はない。それだけは断言できる。

ラフマンは突き放した言い方をした。

するとディアウスは幼子とは思えぬ苦笑を見せる。

「今の父さんの言い方はアーチェンみたいだ」

「真実だからな。もし、お前に《ヤコブの子》に十分な衣食住を提供できる能力があれば、《ヤコブの子》は、むしろ進んでお前に従う。また私もこんなことを言ったりしない」

「無能には自分の運命すら掌握できないし、まして他者の命運を左右できるのは有能な人間だけ——って感じ？」

ラフマンはやや躊躇いながらも頷いた。今のディアウスの言葉はそれこそアーチェンの影響だろう。だが、事実である以上、認めねばならない。

ふと、ラフマーンは何度も読んだはずの《出エジプト記》の新たな側面に気付いた。六十万人という数が歴史的事実か否かは別として、多かれ少なかれ《ヤコブの子》はエジプトから逃げ出した。しかも《ヤコブの子》は奴隷だった——労働力として必要とされる存在だった——という。

ならば、それはエジプトが《ヤコブの子》に見捨てられたとも言えるのだ。自分たちに提供する能力が足りないと《ヤコブの子》に切り捨てられたのだ。

ある日、突然いなくなった《ヤコブの子》に対し、エジプトの民は何を思っただろう。待遇はどうあれ《ヤコブの子》はエジプトの沃野にいた。その実りに生かされてきた。それなのに《ヤコブの子》はわざわざ沙漠へと出て行ったのだ。それも神の声などという、傍から見れば、壮絶に胡散臭い理由で。

それ程、お前たちは無能だ——と断ぜられたのだ。

悲しいことだ。

そして、ディアウスも同じ結論に至ったらしい。

「……逃避というのは訣別に近い概念なんだね」

その言葉はラフマーンにとっても考えさせられるものであった。

「そうだな。逃避とは、己の価値を他者に依存することなく、己の意思で確立せしめんとする行為なのだ」

「でも、それって、凄く難しいことですよ」

「無論だ。しかし、いつまでも難しいことをやらずに生きていけるとは限らない。ディアウスよ、この話で《ヤコブの子》は好きで住み慣れた土地を立ち去ったと思うのか？」

「……………」

「逃避や訣別を好きで行う者はいない。せざるをえない者がいるだけだ」

「……創世において楽園ガーデンを追放された【最初の人間】と同じく？」

「そうだ。雛鳥よ、お前もいずれは自らの翼で次の楽園を探さねばならなくなる」

ラフマーンは最愛の我が子を優しく撫でた。

「それが大人になるということだ」

この時、ディアウスは敬愛する父の言葉に反感を持っていた。口には出さなかったが、逃避など絶対にしたくなかった。何故なら、逃避とは訣別なのだ。それは難しいという以上に、寂しいことではないのか？ 少なくとも自分は父や母——そして、アーチェンと決別などしたくはない。だって、父も母もアーチェンも大好きなのだ。だから、ずっと共に生きていきたいのだ。

それが子供のあり方だというのなら、自分は一生子女のままでいい。
だが、結局、不吉な予言は的中する。

二十年後、アルリックシル・ディアウスは巢立ちの日を迎えた。